

本願開闢懸觀大姊并紹瑾加州第二遺跡也。素意勿令失。と開祖瑩山禪師の申し置かれし禪刹にて、實に當國にては大乗寺に次ぎたる佛刹なりしこと、右瑩山禪師の置文にていちじるし。龜尾記に、淨住寺は、大乘寺開山徹通禪師、父の菩提の爲に建立すといふ。舊地は、今の小姓町地藏橋の邊にありたり。則ち地藏橋は其頃寺の境内にあり。といへり。今按ずるに、徹通禪師の建立也といへるは非なり。舊地は、小姓町舊藩士脇田氏の邸地にて、彼の舊邸にありし石地藏は、淨住寺此の地にありし頃の佛像なりといへり。貞享二年の由來書に、今の寺地は、當寺中興庭室和尚之時、大豆田村に於而二千三百歩拜領仕。と記載し、寺記にも同様に載せたり。大豆田にて寺地を賜はり移轉せし年曆、いまだ詳かならず。

○無涯智洪禪師傳

日本洞上聯燈錄に云ふ。加州法苑山淨住寺無涯智洪禪師。本州之産也。妙年出俗。受業於可鏡鏡西堂。往大乘謁瑩山和尚。俾居侍司。機鋒英邁。志氣絕倫。山恒撫曰。是吾家眞獅子兒也。師益極意。研究積年。不見惰容。遂入堂奧矣。

元亨三年二月、山以師補淨住席。付衣云々。晚莅洞谷。聲光益昌。光明帝諡師之名。特發中使送佛舍利一顆。於山中建三重寶塔。詔爲禪災道場。時曆應元年臘月也。既而謝事歸淨住。以觀應二年辛卯五月九日書偈別衆。恬然而逝。茶毘分骨。藏于淨住洞谷。塔曰新豐。出寂室光一人と。按ずるに、無涯禪師出家し、初めて受業ありし可鏡鏡西堂も、則ち淨住寺の住持なりけん。同聯燈錄に、越中州信光寺珍山源照禪師加州人。投淨住寺可鏡鏡西堂。爲驅鳥。鏡滅後稟遺命。禮瑩山和尚。乃就弟子列云々。とあり。されば無涯禪師は、瑩山和尚の推舉に依りて淨住寺二世となり、寂室和尚はその三世にて、庭室和尚を中興とはするなり。

○塔頭雲門軒新豐庵

本寺由來書に云ふ。雲門軒は、淨住寺三代寂室和尚開基之地。久敷中絶之處、十一代玉田和尚正保二年再興。新豐庵は、淨住寺二代無涯和尚之開基に而、兩塔頭共本寺境内に有之。とあり。右新豐庵は、無涯禪師の傳に、茶毘分骨。藏于淨住洞谷。塔曰新豐。とある是なり。三箇屋版の六用集に、淨住寺塔中雲門軒・新豐庵と載せられたれど、明治の初め、無

檀無住の寺院廢止の官令に依つて、兩塔頭の名を廢せり。

○竹田氏下邸跡

此の下邸は、元祖竹田市三郎の時、利常卿より賜はりしかど、其の年曆等未だ詳かならず。改作所舊記に、延寶四年大豆田村領近所竹田五郎左衛門下屋敷之脇畠云々。と云ふ事見えたり。舊藩中は竹田家中と稱し、此の地に家士共居住す。明治廢藩置縣戸籍編成の時より、竹田町と稱す。又按ずるに、延寶の頃までは、竹田氏下邸をば川下の街尾となしたりけん、延寶の金澤圖に下の如く圖したり。

改作所舊記延寶四年條に、

向後御用地に被召上候故、地子之所立人共、替地相渡候所之覺。

- 一、大豆田村領近所竹田五郎左衛門下屋敷之脇畠所。
- 一、宮腰口三社近所青山將監下屋敷後畠所。
- 一、宮腰口深美右京下屋敷之後近所。

自餘略寫之。

右地子地に有之小家御用地被召上候。拜領地相渡り申者共、向後勝手次第遺し可申候哉与奉存候處、何茂致食議

